

中村 敬教授を語る —生き方を示した教師像—

吉 田 正 治

明治は遙か遠く、大正もすでに遠い。そして、気がついてみると、昭和も、一桁は遠くなりつつある。この 3 月 31 日をもって我が畏友中村敬教授は、いや、いつもの呼び名に戻そう、敬さんは定年退職する。この事実は頭で理解していても心が拒否しようとする。敬さんの存在が、声が、ほほえみが、息づかいまでもいつもそばにあって、私の日常を作ってくれたからである。こうした感情は同僚となってからは絶えずあったのだが、最近、特に私が学部長になってから陰に陽に彼に支えられ、そして 1 年遅れて彼が研究科長になってからは、一層強くなった。しかし、会うが別れのはじめ、が人生の運命なら仕方のない仕儀であろう。

昨年 11 月 9 日に成城大学で開催された第 93 回「成城大学英語教育研究会」に出席する機会を得た。この研究会は、成城大学および成城大学大学院を卒業して英語の教師になった人たちを中心に、英語学を専攻する大学院生、それに敬さんを慕う、主に中学校・高等学校の英語の教員を加えて組織されたものである。そしてこの 93 回目の研究会は、主宰者の敬さんが今年度限りで成城大学を定年退職することを知った会員たちが、現役最後の話を聞こうと企画されたものであるから、事実上の最終講義であった。

敬さんがこの講演会で取り上げたのは日頃敬愛してやまぬ中野好夫で、「私にとっての中野好夫—英語教師の原風景—」という演題の下に、①中

野好夫がどう生きたか、②彼が戦中・戦後身をどう処したか、③彼との出会い、という3つの観点から中野好夫論を展開した。①では中野が生きた時代背景を概述しながら、中野をア) 国家に足をおいてものを考えた伝統主義者 (nationalist) である (その意味では森有礼も同じ) と同時に人間としての矜持を持った人 (moralist)、イ) アングロ・サクソン文化にのめり込んで必死に勉強した人 (その意味では夏目漱石をどうしても越えられなかった) と捉え、具体的には a) 研究者・教育者、b) 翻訳者、c) 社会運動家という3足の草鞋を履いた人物と規定した。②では中野は戦前において戦争へ協力したことに対する贖罪として戦後は沖縄問題に入れあげたと述べ、③では中野と出会ったことで敬さんが学んだこととして、ア) 専門分野の深い知識と確かな判断力を基に自閉的でない人間を作ること、イ) 専門分野を越えて、視野を広げ社会を見る目を養うこと、ウ) 人間に対する興味を持ち続けること、エ) 歴史的視野を持つこと、オ) 己の信ずることを実行に移すこと、カ) 日本人としての矜持を失わないことを挙げた。

敬さんの中野好夫論を聞きながら、私の胸に浮かんできたのは、これは、敬さんの半世紀になんなんとする英語教師の総括なのであり、中野好夫を語りながら実は自分の来し方を語っているのだな、という思いであった。そういえば、30年近くに亘る友達づきあいでも解けぬ謎として消えることのなかったことも、氷解するのである。

敬さんは、1978年に三省堂の編集部に依頼されて、編集主幹の一人として文部省検定の中学校英語教科書『ニュー・クラウン』に携わった。この教科書は敬さんの主義主張の反映した教科書で、これまでの教科書がともすれば英米の文化受容一辺倒であったものを、多言語主義・多文化主義という比較文化論的な視点を採り入れ、アジア・アフリカにも十分な目配りをして発信型に変えた、極めて斬新なものであった。ところが、それから10年経た1988年に出版した新しい高等学校向けの文部省検定英語教科

書『ファースト』は、敬さんの言語観や民族観をもっとラディカルな形で前面に押し出したものだから、まず自民党の保守派に属する文教族議員の目にとまり、果ては右翼の怒りを買う結果となった。特に、敬さんが最初のイギリス留学で知り合った、マレーシアの学芸大学から来ていたドン・ジャスタセン氏から聞いた話を下敷きにして書いた、旧日本軍の残虐行為の件が彼らを怒らせたのである。これは、敬さんにとって決して忘れることのない社会的事件にさえなってしまった。私ははらはらしながら見守るだけであったが、あるとき問題の課を削除することによって事態の沈静化を図ると聞いて、敬さんらしくないじゃないかと批判したとき、三省堂の編集者たちの生活がかかっているんだよ、と敬さんは悲しい顔をしたのだった。が、正直に言えば、歴史の教科書にすら載せるのを敬遠したくなるような、政治的にも社会的にも微妙な (sensitive) 問題を、英語という外国語を教えるための教科書にわざわざ取り上げなくてもいいじゃないか、その他にいくらかでも適切な教材がないわけじゃないなのに、という思いを持って余していた。

しかし、いまこうして敬さんの中野好夫論に素直に耳を傾ければ、敬さんの教科書に対するこだわりは当然の帰結なのだとなんげがゆく。教科書作りは、あるいは教科書を観る目は、敬さんが他のところで述懐しているように、「言語観と民族観を基本としたその人の思想（世界観）の質と密接に関わる」、つまり、「その人が内面的にどの程度濃密に生きているのか」が問われるのであり、とどのつまり、それは、敬さんにとって学問と同様に、生き方そのものだからである。中野好夫がアングロ・サクソン文化に全身全霊を傾けてもしっくりせずかつ漱石を越えられないと悟ったとき、戦前の戦争協力に対する贖罪の気持ちも手伝って、英語教師を辞め社会評論活動に逃げ込んだように、敬さんも典型的な「英語オタク」から出発したが、11年経て壁に突き当たりそれを克服するために British Council の試験を

受けてロンドン大学に留学し（1966年）、ウエールズとマルタ共和国でいわゆる英語教育の実習をしているときに英語以外の言語の存在に気づき、と同時に、上述のドン・ジャスダセン氏と知り合うことによって自分のアジアに対する無知に衝撃を受けたのが敬さんの世界観を変える契機になった。そして、再び1980年に言語問題を調査することを目的としてウエールズに1年間滞在し、英語がウエールズ語をいかに抹殺したかを歴史的に辿ったことがその後の敬さんの生き方を決定したのである。英語の国際的進出はイギリス帝国の植民地政策の、また第2次世界大戦後は、アメリカの圧倒的軍事力・経済力・政治力の圧力の結果であり、それはまた各地域文化のアングロ・アメリカ文化による植民地化をもたらすことになる。英語の教師であることは結果として「英語一極集中状況を維持し再生産する」ことに貢献しかねないことを考えれば、その出発点において英語がすべてであった敬さんにとって、その状況はまさに「文化語としての英語の豊かさと諸民族言語を不可視の状態に陥れてきた英語の侵略性の中で宙吊りにされた」ものであったのである。この宙吊りの苦しさから自分を救うための1手段が教科書作りであってみれば、それは研究の合間に行う片手間の仕事になるはずもなく、おそらく中野好夫にとっての沖縄問題に相当するものであったのであろう。とすれば、妥協の入る余地がなかったことも頷けるわけである。

この誠実さと倫理性が敬さんの生き方を規制していることは敬さんの言動を見れば一目瞭然である。自分がBritish Councilの奨学金を得てロンドン大学に留学できたことに感謝しながらも、それが記号として「象徴的資本」になっていることを認識し、もし「イギリスが日本人のために税金を使うのであれば、日本の側も同じだけの奨学金をイギリス人に提供しなければ、対等な関係を築くことができない」と指摘する。この公平感覚は敬さんの高い倫理観の表出であることは言うまでもない。また、日常の言動

においても、たとえば、昨年の 10 月の始めであったろうか、教授会の後で 2 人で一杯やっていたとき、身辺の整理をしていたのであろう、敬さんはふと、「考えてみると身すぎ世過ぎをやりすぎた。だから学者として中途半端になってしまったんだ」と苦渋に満ちた口調で述懐して私を驚かした。この激しさがあるからこそ、ある若い同僚が自分の仕事と全く関係のないテレビコマーシャルに出演していることを許せない気持ちになったり、2 年ほど前に大学全体が新学部の創設を巡って揺れに揺れていたとき、教授会で「内職していた」これまた若い同僚に「なぜ発言しないのか」と迫ったりすることになるのであろう。学問が自閉的な人物をつくってはならないのである。そこで思い出すのは、文学研究科で立ち上げた学術講演会（文芸学部との共催）の第 1 回（2001 年 12 月 13 日に「21 世紀が学問に求めるもの」という演題の下に開催された）の講師として招かれた木村尚三郎氏のことばである。氏は講演の最後の部分で、最近の若手の研究者に自分の狭い専門分野に精を出していればすべての免罪符が得られると考える傾向がある、との批判をしておられたが、この批判は正に敬さんと共有する感情であったろう。

学問は、敬さんにとって、生き方そのものである。教育はなおさらである。半世紀に及ぶ教師生活を通して変わらぬのは、「いつの時代でも若者は事柄の本質を知りたいという欲求を持っている」のだから、真摯に向き合えば学生たちの中にはかならず真摯に対応してくれる者がいるという信念である。事実、2 月 22 日に開かれた敬さんのゼミナール最終講義には、北は北海道から南は四国から 120 人に及ぶゼミ卒業生が集まったという。

むしろ、「変わったのは教師の方である。学校（主として大学）に「競争原理」と「成果主義」が持ち込まれて以来、教師と教師の人間関係ががらりと変わった。筆者の見るところ、とりわけ 50 代以下のかかなり多くの教師たちに見られる、自閉的で非社会的な言動は、この国の教育の未来につ

いて暗澹たる思いをさせられる。彼らは、その道のテクノクラートではあっても、自分のまわりのことは目に入らない。教師もまた「慎み」というもっとも大切な徳目をどこかへ置き忘れてしまった。」（「ある英語教師の半世紀」『英語教育』大修館、2001. 4-2002. 3 からの引用。）教師は「慎み」を、つまり「人としての矜持」を失ってはおしまいである。私は敬さんのこの警告を拳拳服膺したいと思う。

2003年2月28日